

## 日本のウルク・タク（大山）

安田公男

URL:chinggis-ff

### 1. モンゴルの大山（ウルク・タク）

筆者は先の論考「キジル・バシの地」の中で、「ウルク・タクのソゴク水」を考証し、古いトルコ語で「大きな山」を意味するウルク・タクは、現バヤンホンゴル・アイマクにそびえるイフ・ボグド・オールであり、その麓のオログ湖がソゴク水であるとした(1)。

図1 イフ・ボグド・オール（大きな聖なる山）



山はゴビアルタイ山脈の最高峰で 3,957m ある。これより高い山は北のモンゴルアルタイ山脈にはいくつかあるし、イフ（大きい）やボグド（聖なる）の名の付く山ならモンゴル中に多くある。だが、標高千数百メートルの麓から 3,000m 近く屹立し、かつこのように長大な山容を見せる山はあまりないのではなかろうか。崇高さを感じさせるこの山は、日本人なら自然と手を合わせたくなる気持ちが湧くと思う。

## 2. 日本のウルク・タク(大山)

一方、日本にもオオヤマではないかと思われる二つの山がある。一つが鳥取の大山だ。文字だけ読めばオオヤマだが、なぜかダイセンと言う。麓には大神山神社がある。

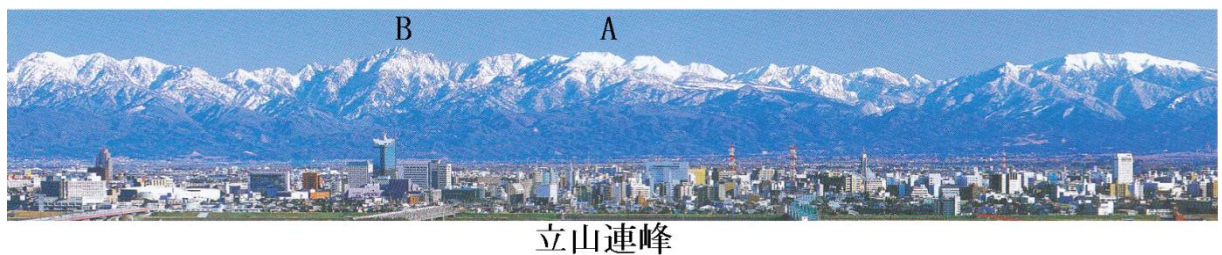
図2 大山(ダイセン)



別名伯耆富士は西からの眺めであり、南北から見るとこのように荒々しい山容である。大国(オオクニ)主尊の神話で知られる土地にそびえるのだから、この山もオオヤマと呼ばれるのが当然のように思う。ダイセンと呉音で呼ばれることに違和感があり、仏教に関係があるとの説明を読んでも納得がいかない。

二つ目は富山の立山である。立山は、富士山、白山と並んで日本三大霊峰とされている。富山市内から見た立山連峰は雄大である。Aが立山、Bが剣岳である。

図3 立山連峰



立山は雄山、大汝山、富士の折立の南北に並ぶ三つの峯の総称で、3,000mほどの高さがある。南の峯が雄山(オヤマ)で、頂上には雄山神社が鎮座している。そして麓には大山(おおやま)町がある。立山は元々今の剣岳を表し、太刀山の意味であったとする説がある。ではそれ以前、現在の立山はなんと呼ばれていたのだろうか。神社名から考えると、今の立山も古くはオオヤマと呼ばれていたのではなかろうか。神社名と町名にその名残がある、と考えられる。太刀山と呼ばれた山は、同じ意味の劔岳に替えたのだろうか。旧唐

書の倭国伝には、「倭国の北界は大山をもって限りをなし、その向こうは毛人が住んでいる」との記載がある。ここで言う大山は、南北日本アルプスや富士山も含めた、中部日本の大きな山塊を示していると一般に考えられているようである。だが、富山平野から屏風のように 3,000m ほど切り立っている立山連峰を見ると、この山脈こそが旧唐書の言う大山と思われてならない。親不知、子不知の天険があるのも限りをなすとの表現に合っている。

### 3. 山名が変えられた理由

このように、二つの山は昔オオヤマと呼ばれていたのではないか、という疑いが限りなく強い。では、なぜ、今の名前に変わってしまったのだろうか。ギリギリ元の名を思わせる名で留まっていることからして、時代の流れで自然に変わったのではなく、変えられてしまったように思われる。その理由は、オオヤマと呼ばれる権威の高い存在があつて、それに遠慮させられたからではなかろうか。その大きな権威は何かと考えると、愛媛の大三島にある大山祇（おおやまづみ）神社が直ぐに思い浮かぶ。神社と神体である山を表す画像は、現在のものより下の戦前の絵ハガキのものが良かった(2)。

図 4 大山祇神社



ピラミッド状をした、いわゆる神奈備山が神社の背後にある。手前が安神山といって標高 300m ほどである。一番奥の山が標高 400m 少々の鷲の頭山で、古くはこれらを併せて神野山（こうのやま）と呼び、奈良の三輪山のように、山そのものが御神体である。大三島という瀬戸内海の島の中では大きい山の方なのだろうが、ダイセンやタテヤマとは規模が比べものにならない。だが、この山の麓の神社がオオヤマと呼ばれており社格が高い。恐らく、大和朝廷の下に信仰が一元化されると、オオヤマの名称も一本にすべきとの意見があり、イザナギ、イザナミ両主神の子が祭神であり、戦前は国幣大

社であったこの大山祇神社が、オオヤマの名を独占してしまったと思われる。鳥取の大山はやむなく読み方をダイセンに変え、大山神社を大神山神社とした。出雲王朝の伝統があるので、文字だけでも大山と残せたのだろう。一方、富山の大山は、隣の山の名を移動させて文字も立山として表向きは大山の名を消した。だが、峰の一つと神社名を雄山と微妙に変えて元の名の面影を保った、と言えないだろうか。

大山祇神社はオオヤマの名を独占しただけあって尊崇を受けている。武士からの奉納品が多く、源義経の鎧などの国宝がいくつもある。元寇で戦った武士が奉納した、元代の兜と弓矢も現存しているので、日本のイフ・オールもモンゴルと深い関係がある。これらのモンゴル帝国時代の遺品を日本はもっと誇ってもよいだろう。

### ○余談

筆者は島根の工場に赴任していたことがある。車で神戸の自宅との行き帰り、高速道路から大山の姿を何度も眺めた。また、富山の大山町は出生地であるが、訳があって遠く離れて訪れる縁がなかった。40歳頃に初めて訪れて立山連峰を目にした時には感動した。富山の子なら成人になった証として登るこの山を、退職後足を鍛え直して登った。67歳の時である。モンゴルのイフ・ボグド山の写真を見た時、この二つの山が思い浮かんだ。

以上

### <参考文献>

- (1) 安田公男(2019)「キジル・バシの地」, HP チンギス・カンとその友人たち(chinggis-ff.jp)
- (2) 2016年にはネットで見ることができたが、現在は探せない。